

## 近代東京における擬木擬石づくりの名手、松村重の足跡

A Study on the Achievements of Shigeru MATSUMURA as an Expert of Making Imitation Trees and Imitation Stones in Modern Tokyo, Japan

栗野 隆\*

Takashi AWANO

**Abstract:** This paper focusses, on the achievements of Shigeru MATSUMURA (1895-1962). The results of document analysis, interviews of the MATSUMURA family and field surveys, led to this papers new findings: The introduction of the idea of imitation trees and imitation stones to parks in Tokyo came from Kiyoshi INOSHITA (head parks in Tokyo city) who saw various examples of imitation trees, stones, and rocks in the Buttes-Chaumont Park in Paris during the late Taisho era. INOSHITA recommended that MATSUMURA study the making of imitation trees and imitation stones for park usage. MATSUMURA's first imitation tree work, was the Nanai bridge in the Inokashira Park around 1926. He made the monkey mountain in the Ueno Zoo in 1931. This facility was the first monkey mountain in Japan. He also worked to preserve ancient sites with by using imitations. That was the first case of preserving an excavated site in Japan. At present, in Japan an imitation tree is called 'Giboku' and an imitation stone is called 'Giseki' which are created by MATSUMURA. From the research, we can recognize that Shigeru MATSUMURA was a father of imitation park items in modern Japan.

**Keywords:** *imitation tree, imitation stone, Shigeru MATSUMURA, Kiyoshi INOSHITA*

**キーワード:** 擬木, 擬石, 松村重, 井下清

### 1. はじめに

近時、擬木擬石の製作技術が近代の造園技術として評価され、日本近代における擬木擬石の歴史、意匠、技術の一端が明らかになってきている。日本製のモルタル仕上げの擬木擬石を造園空間に導入した事例には、明治期に宮内大臣を務めた政治家、田中光顕が明治42年に造営した古谿荘庭園（静岡県富士市）<sup>1)</sup>、日本のベルト王といわれた実業家、新田長次郎が大正初期から昭和初期にかけて築造した琴ノ浦温山荘庭園（和歌山県海南市）<sup>2)</sup>がその最初期の遺構として知られる。植治こと7代目小川治兵衛も、大正9年に稲畑邸和楽庵庭園（現・何有荘庭園、京都府京都市）の作庭の一環で設けた隧道内部にセメントを塗りつけて擬岩仕上げとした<sup>3)</sup>。日本近代における擬木擬石の製作方法については、温山荘庭園を造園した新田長次郎の回顧録の記述内容の精査、揚輝荘庭園（愛知県名古屋）や天王寺公園日本庭園（現・天王寺動物園内、大阪府大阪市）等の大正期から昭和初期に築造された事例の現地調査、近代の美術教育家、矢崎好幸が著した『実技詳解セメント工』（昭和14年）<sup>4)</sup>の精読によって、擬木擬石を製作するに際してのコンクリートとモルタルの配合設計、鏝や篋による表面調整の工夫の一端が詳らかにされた<sup>5)</sup>。

擬木擬石の近代における導入経緯、製作をおこなった技術者については、大阪および阪神間に関しては分かっている<sup>6)</sup>。フランス式の擬木工法を習得した中沢考が大正15年頃に大阪市初代公園課長であった椎原兵市を訪ね、大阪市内の公園に擬木を使ってはどうかと勧めた。椎原は大阪の住吉で造園業を営む橋本八重三にこれを紹介して擬木製作を奨励し、同時期には、横浜の野毛山公園の擬木にヒントを得て、擬木製作に着手した芦屋の造園技術者、小林観山が存在したことが判明している。そして橋本八重三は昭和2年には「橋本式人造自然木」という名で擬木製品の商品化に成功、昭和8、9年には、椎原の設計のもと、小林観山が天王寺動物園の猿ヶ島や天王寺公園内日本庭園でダイナミックな擬石製滝石組を造形したことが知られる<sup>6)</sup>。このことをまとめた先

行論文では、日本近代における擬木擬石の造形意匠の系譜を具体的に検討してゆくためには、同時期に擬木擬石が造園空間に導入された近代東京の状況を明らかにしなければならないということを課題に掲げている。近代東京の造園空間の擬木擬石の製作には、左官師で松村製作所（松村組）創始者、松村重が重要な役割を担っていたことが指摘されている<sup>2)</sup>。しかし、松村重がいったいどのような人物で、どのような造園空間の擬木擬石を手掛けたかということについては明らかになっていない。

そこで本稿では、日本近代における擬木擬石の技術史上の評価を検討するための足がかりとして、近代東京に擬木擬石が導入された経緯を再検討しつつ、松村重の出自、擬木擬石の製作に関与した経緯、彼の手による擬木擬石の特色を明らかにすることを試みる。研究方法としては、文献調査を実施したが擬木擬石に関する文献資料は極めて乏しかったため、特に松村重の孫の松村賢氏と松村守氏（有限会社松村擬木）に聞き取り調査<sup>7-9)</sup>を実施するとともに、松村重が手掛けたことが確実な擬木擬石で保存状態も良好な近代東京の造園空間の現地調査<sup>10)</sup>を実施した。なお本稿で対象とするのは、外装をモルタルで仕上げた擬木擬石である。

### 2. 近代東京の造園空間における擬木擬石の導入

近代東京の造園空間において、最初期に導入された擬石で確認されているものは、明治29年築造の東京銀座の服部長七邸の屋上庭園であった<sup>11)</sup>。元来左官師として出発した服部は、たたきの技術を改良した「長七たたき」による飛石や手水鉢を設けた。しかしこれは漆喰によるものでモルタル塗の擬石ではなかった。次に擬木の導入の事例には、宮内省内匠寮の福羽逸人と市川之雄が明治38年に新宿御苑の池泉に架かる橋にコンクリート造モルタル仕上げの欄干を用いた<sup>12)</sup>ことがよく知られる。しかしこの擬木橋はフランス製で日本製ではなかった。内匠寮の市川之雄は、明治41~42年に東宮御所庭園の池泉橋の欄干に擬木を導入したものの、これは青銅製<sup>13)</sup>でコンクリート造ではなかった。また、大

\*東京農業大学地域環境科学部

正3年に開催された東京大正博覧会（於・上野公園）では、巨大な鉱山大模型館が擬岩造形として展示された<sup>14</sup>。この模擬山岳の構造や外装材料は不明であるが、博覧会展示施設という性格上仮設的なものであったことは間違いなく、恒久的な擬木擬石ではなかったと指摘できる。コンクリートやモルタルを施した擬木擬石の本格的な造園空間への導入は、東京市2代目公園課長、井下清の大正末期における関与を俟たなければならない。

井下の大正末期における擬木導入を指摘しているのは上原敬二である<sup>15</sup>。上原によれば、松村重がキューバに渡航した際、井下の友人の中沢考からフランス式の擬木工法を習得したという。松村は大正初期に帰国し、大阪の椎原兵市を訪ね擬木を紹介したが、当時まだ関心がなかったため、その後、井下に紹介した。井下は日比谷公園の園丁に松村と協議させ、その工法を習得させようとしたが真の工法が不明であった。井下は大正14年にパリに渡り、擬木擬石が多用されているビュットショーモン公園を訪れ、擬木擬石の詳細を調査した。井下は工法に改善をおこない、東京の公園に広めたという。上記の上原説については、先行論文<sup>9</sup>によると椎原が大阪市技師になったのが大正9年、公園課長になったのが大正13年であったため、大正初期では時期的な齟齬があると指摘している。また元東京都技師の村松善豊は大正15年に欧米視察から帰国した井下が松村に擬木製作を奨励した<sup>16</sup>とし、上原説とは反対のことを指摘している。松村家への聞き取り調査<sup>7</sup>から、松村はキューバに渡航した事実はなく、擬木製作は井下から勧められたことが明らかとなった。したがって本稿では、大正15年に欧米出張から帰国した井下清が、松村重に擬木擬石製作を勧めたと考えておきたい。井下は、大正12年に勃発した関東大震災を契機とする復興公園計画が大正13年7月に内閣の認可を受け、実施に移すばかりとなった矢先の、大正14年夏に、東京市および内務省復興局より欧米の公園施設の視察に関する辞令を受けている<sup>17</sup>。大正14年、井下は船で渡米し、在米約3か月の後、渡欧した。もっぱらパリを起居の拠点とし、フランス、ドイツ、イギリス等の公園を半年以上に渡って調査した<sup>17</sup>。井下の欧米出張はこの1回のみ<sup>17</sup>であるので、上原説にいう井下のパリにおける擬木擬石調査はこのことを指しているのであろう。時期的にも矛盾しないので、この点は支持できる。

それではなぜ、井下が東京の公園に擬木擬石を使おうとしたのか問題である。この点は推測の域を出ないが、井下が渡航したのは、関東大震災による帝都復興計画が進められていた時期である。帝都復興計画では「都市の不燃化」が叫ばれ、小学校や集合住宅等の復興建築にコンクリートが導入されたが<sup>18</sup>、井下清率いる東京市公園課が主導した大正末期から昭和初期の公園の整備においても、井下は「公園の不燃化」を考慮してコンクリートやモルタルを施した擬木や擬石を導入すべく、松村重にこれを紹介したのではないだろうか。この推測を補強する資料には、大東亜戦争下に書かれた井下の論説があげられる。「決戦と造園」<sup>19</sup>では、爆撃機に対する各種施設の強化と防火の必要性を述べたうえで、自然を模倣する「偽装」、「偽木」（ママ）を鉄筋コンクリートで製作することの有効性を説いている。「庭の防空防火」<sup>20</sup>でも、防火性のあるセメント造擬木袖垣を利用した避難路の確保に言及している。上記の論説は関東大震災から時期差があるものの、コンクリートの不燃化を井下が意識していたことが確実であったことを示していると思える。

次に本稿では、擬木擬石の実際を手掛けることとなった、松村重の出自、実際の業績を追跡することとしよう。

### 3. 松村重による擬木擬石づくりの展開

#### (1) 松村重の出自

松村重（1895～1962）は、明治28年8月3日に生まれた（写



写真一 松村重（1895～1962）（松村家提供）

真一<sup>7</sup>。父は左官職人であり、駿河台の東京復活大聖堂（ニコライ堂）の左官工事を手掛けた<sup>10</sup>。松村の父は山梨出身であったが、東京は浅草の山谷で左官業を創業した<sup>7</sup>。松村は父の仕事を受け継ぎ、左官職人として仕事に励んだ<sup>7</sup>。彼は非常に仕事熱心であったようであり、大正8年にはセメント建築用材製造法の発明特許権、翌9年には石膏建築用材製造法の発明特許権を取得している<sup>21</sup>。まだ20代半ばの頃であった。井下清とは、擬木擬石製作を勧められた大正15年以前から関係があった<sup>7</sup>らしい。

#### (2) 松村重の擬木擬石の仕事

松村重の近代における主要と考えられる仕事を、聞き取り調査と文献調査から整理した（表一）。本表には具体名として明記できなかったが、表に掲載されたもの以外にも各小公園のベンチ、野外卓、土留め用の切丸太、飛石、地方からの注文や出張製作の依頼などが多数あり、多忙を極めていた<sup>16</sup>ようである。

##### (i) 最初の擬木製作

松村の最初の擬木の仕事は、井の頭恩賜公園（東京都武蔵野市、三鷹市）の池の橋である<sup>7,10</sup>。これは長い杉丸太橋を改修したもので、橋杭から手摺まで鉄骨鉄筋コンクリート造とし、表面を擬木仕上げとした<sup>16</sup>。良い着色剤がなくベンガラと灰墨の着色で技術も稚拙だったが、完成したときは珍しがられた<sup>16</sup>ようである。この擬木橋の製作年代であるが、松村家への聞き取りでは大正末期<sup>7</sup>、村松は昭和3年8月<sup>16</sup>、前島康彦は昭和27年<sup>23</sup>としている。しかし前島の年代記載は誤りの可能性があり、井の頭公園を特集した雑誌「グラフみたか第9号」<sup>24</sup>では昭和7年と記載し、参考文献には前島の上記文献<sup>23</sup>を明記している。ただし、昭和7年の完成と考えた場合、大塚公園傘亭や上野動物園猿山が先行することとなり、処女作とはいえなくなる。次に昭和3年8月と考えた場合は、大塚公園の擬木施設が松村の擬木の処女作と位置づけられる。もし、井の頭公園の擬木橋が昭和3年8月の完成であれば、これを遡る同年3月完成の大塚公園傘亭<sup>25</sup>にも稚拙さが表れるはずである。大塚公園を現地調査<sup>10</sup>したところ、本公園の傘亭は清澄庭園の傘亭（昭和7年完成、平成23年の東日本大震災の影響で現存せず）と茅葺の様子や親柱の立体感など、表現的には遜色がなく、村松のいう技術的な稚拙さは大塚公園傘亭には見られなかった。なおかつ、昭和3年1月発行の井下清が著した『公園の設計』<sup>26</sup>には、橋梁の設計において「鉄筋混凝土にて皮付丸太を模造したものなどがある」（195頁）とか、公園の四阿の設計において、「公園の園亭は（中略）位置に依つては葦屋根の山家なども又必要であつて、其等を鉄筋混凝土で模造したものは巴里市や東京市の公園などに建設されて居る」（247頁）と記載されている。したがって近代東京の公園には昭和3年1月以前には何らか

表一 近代東京を中心とした松村重の主たる仕事

名称	製作施設	製作年代	現存
井の頭恩賜公園	擬木橋	諸説あり (大正末期※1, 昭和3年8月※2, 昭和27年(昭和7年カ)※3)	無
大塚公園	傘亭(屋根:茅葺仕上げ, 柱:擬木仕上げ) 擬木柵	昭和3年3月	有
上野動物園	猿山(擬岩仕上げ)	昭和6年10月	有
清澄庭園	傘亭(屋根:茅葺仕上げ, 柱:擬木仕上げ)	昭和7年	無
有栖川宮記念公園	擬木橋(3本) 橋脚基礎部擬石 擬木藤棚 擬木階段踏面 擬木柵 池泉護岸擬石	昭和9年	有
慶応義塾大学日吉キャンパス	弥生時代住居址保存整備	昭和11年12月	有
目黒雅叙園	擬木橋 擬木柵 擬木丸太階段土留	昭和17年カ	有
旧安田庭園	擬木製四阿	不詳	無
成田山新勝寺	擬木製四阿	不詳	有

注: 井の頭恩賜公園欄の製作年代の記載について、※1は松村家への聞き取り調査、※2は村井善豊の指摘、※3は前島康彦の指摘を示す。

の擬木施設が存在したことが確実であることから、村松の指摘する擬木の稚拙さも考慮すると、時期的には松村家の聞き取りで得た年代に蓋然性が高いと判断でき、松村の最初の擬木製作の時期と造園空間を、大正時代末期(井下の帰朝を考慮すると大正15年)の井の頭恩賜公園であったという説を有力視しておきたい。

(ii) 上野動物園における擬石擬岩の導入

松村が擬石擬岩を導入したのは、上野動物園(東京都台東区)の猿山であった<sup>27</sup>。これは、昭和2年から始まった上野動物園の大改造の一環で作られたものである<sup>27</sup>。同年に完成した主たる施設として、ホッキョクグマ舎があげられる<sup>27</sup>。本舎で採用されたのが無柵放養式の檻で、わが国で最初のものであった<sup>27</sup>。猿山も、この方式を採用したものである。「園長のサル山」<sup>28</sup>と題した大島増次の回想には、昭和7年に上野動物園主任技師となる古賀忠道の逸話が紹介されている。大島によれば、猿を放し飼いで飼おうとする提案をしたのは古賀忠道その人であり、東京市ではとんでもないということで大きな反対にあったという。しかし古賀は絶対大丈夫だと、粘り強く説得してまわったというのである。この猿山の設計を担当したのは相川要一であった<sup>27</sup>。『上野動物園百年史』<sup>27</sup>には、猿山の形を検討するために仕事熱心な左官ひとりをつれて房総の山々を探索し、盆景をつくったとある。聞き取り調査<sup>27</sup>では、相川にお供して房総の山々を見て歩き、全体の擬石擬岩を製作したのは松村重であったことが判明した。そして盆景で山の形態を検討したのは松村の番頭のひとり、池田九二四四(くによし)であった<sup>27</sup>。完成したのは昭和6年10月であった<sup>27</sup>。

猿山は、31メートル×18メートルのプールに作られたもので、幅21.5メートル、奥行き8.2メートル、高さは基底部からおよそ10メートルと、大規模なものであった<sup>29</sup>。構造は、コンクリート造モルタル仕上げであり、内部は空洞にして竹を籠状に編んで骨組を作成し、ムシロで覆った上に、擬石擬岩を作りだしているという(写真-2)<sup>7</sup>。これはわが国最初の猿山であり<sup>27</sup>、その後、昭和9年に天王寺動物園猿ヶ島(猿山)<sup>30</sup>、昭和12年開園の名古屋の東山動物園にも猿山が作られていった<sup>31</sup>。すなわち上野動物園の猿山を祖形として、このような擬石擬岩の造形がわが国の

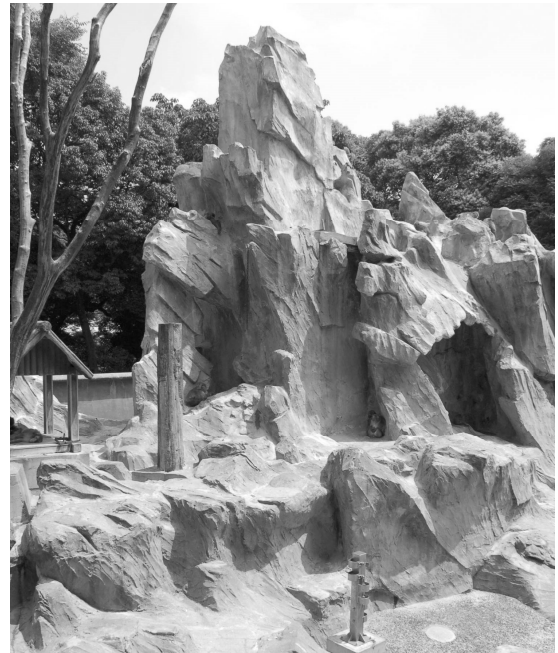


写真-2 上野動物園猿山の現況(平成21年6月筆者撮影)

近代動物園に波及していったとみることができよう。なお、上野動物園の大改造については、クマ舎(昭和2年11月完成)、ヒグマ舎(昭和3年3月完成)、オットセイ池(昭和3年12月完成)にも、背景の岩山にコンクリート造の擬石擬岩が導入された<sup>27</sup>。当時東京には、松村重以外に東京市公園課設計の造園空間の擬木擬石を製作していた人物は確認されていないことから、これらの施設も松村が手掛けた可能性があることを本稿では指摘しておく。

(iii) 松村重による遺跡の保存整備

慶応義塾の校地のひとつである日吉台(現・慶応義塾大学日吉キャンパス、神奈川県横浜市)は、同校が入手後、昭和7年に実施された土木工事にもなって弥生時代の住居址が多数確認された<sup>32</sup>。その後昭和11年3月に教授間崎万里の指導のもとに発掘調査がなされた<sup>32</sup>。その結果、以前検出された6基の堅穴住居址(第101号住居址から第106号住居址)と同年新たに確認された1基の住居址(第111号住居址)の計7基のうち、第101号と第106号を除く5基を永久保存することが決定した<sup>32</sup>。

そのため、慶応義塾は日本庭園協会を通じて龍居松之助と平山勝蔵の意見を聴取し、保存整備工事を実施することとした<sup>32</sup>。実際の保存整備工事は、松村重がおこなった<sup>32</sup>。松村は5基の堅穴住居址をコンクリートで固定し、外面にマイン・カーネクションという塗料を塗り、床面の赤土の天然色をそのまま表したものを同年12月に完成させている<sup>32</sup>。塗料の詳細は不明であるが、マインとは、ドイツ製の鉱物性顔料で生成された耐アルカリ性のセメント着色剤である<sup>33</sup>。昭和初期には、左官・建材商社である藪原商店が輸入して扱っていた<sup>33</sup>。カーネクションはわからない。松村の保存整備について、とりわけ、第111号住居址は完全な原形を残す弥生時代の住居址として保存されたものとしてはわが国最初とされ、学界の注目を集めたようである<sup>32</sup>。

高瀬によれば、わが国の遺跡の保存整備について、発掘遺構の最初期の整備事例は、昭和24年に建築家の堀口捨己の復元案によって縄文中期の堅穴住居の整備と周辺整備をおこなった与助尾根遺跡(長野県茅野市)や昭和26、27年に弥生時代の住居址の復元と環境整備がなされた登呂遺跡(静岡県静岡市)とされていた<sup>34</sup>。ただし今回本稿では、これらの遺跡よりも早く、昭和11年に発掘遺構にもとづいて保存整備がなされた事例を確認することができ、その保存整備の実際を担当した人物についても、松村

重であったことを明らかにすることができた。

### (3) 有栖川宮記念公園にみる松村重の擬木擬石の技法

昭和9年に開園した有栖川宮記念公園（東京都港区）には、松村の手による擬木擬石施設が多く残存していることが松村家への聞き取り調査<sup>7,8)</sup>からうかがえた。そこで、松村の擬木擬石の技法上の特色を知るために、松村家の方とともに現地踏査<sup>9,10)</sup>による詳細な観察をおこなった。現地調査で判明した松村の手による施設は表-1にまとめたとおりである。以下に松村の擬木擬石の特色を述べる。

#### (i) 擬木の基本的表現—小口割れ、樹皮の皺、枝の切口

松村の擬木に基本的に施される表現が小口割れと樹皮の皺である。小口割れは木材の乾燥にもなう小口面の放射状の割れであり、現代の擬木にも施される。樹皮の皺も現代の擬木にみられる表現であるが、現代のモルタル仕上げの擬木の上塗りの中塗りの厚みが約1.5センチ程度なのに対し、松村の場合は2.5~3センチ程度である<sup>8,9)</sup>。したがって皺もその分深く仕上げることができ、より自然みのある擬木として表現できる点に特色がみられる。

また、枝の切口も随所に確認される松村の表現である。この表現方法も2種類あることが確認できた。ひとつは、樹木を伐採した状態で落とした枝の切口とみられる表現、もうひとつは、樹木が生育しているときに落とされた枝の切口とみられる表現である。前者は、樹皮が小口の断面と端部を揃えているが、後者は樹皮が切口をやや覆うような仕上げとする（写真-3：左）。松村が、本物の樹木をよく観察していたことをうかがわせる仕上げである。

#### (ii) 元口と末口の意識

さまざまな擬木施設において、柱に元末を意識するのは当然であるが、松村の手掛けた藤棚や橋を観察すると、藤棚の桁材や橋桁の受け木には、太さを少しずつ細くした材を交互に配して、元末を意識して表現している工夫がみられた。本来は鉄筋コンクリート造の円柱形の部材にモルタルを塗着しているため、材の太さを変えるのはひと手間要するのであるが、松村の擬木は徹底して元末を表現している点が注目される。

#### (iii) 木構造の意識—木材における背と腹、継手

松村の擬木施設を観察した結果、木造の施設に採用される構造を意識した表現が施されていることが確認できた。ひとつは、橋桁の受け木や梁といった構造材には、他の部材が載る部分には年輪密度を高く表現し、下部には年輪密度を低く表現している点である。木造建築では、立木の年輪がどのような密度を持っているかで構造材として使用する際の上下が決まる。すなわち、年輪密度が高い方が荷重を受ける部分として材の上部として用い、年輪密度が低い方を下面に用いるが、まさに重は構造材の「背」（山側）と「腹」（谷側）を意識して年輪密度を表現していたことが確認できた。もうひとつは、擬木橋の桁や擬木柵の横材など、一定の長さを要する部材があるが、松村は、これらを継手でつないで表現している点に特色が見られる。仕口は、両方の材を半分の厚さに欠き取った、相決りという継手を採用している（写真-3：中央）。

上記のような表現は、本来、コンクリート造の施設であるため、

必要のないものである。しかし松村の表現は、本物の木材で作った場合はどうしなければならないかということ意識していたとうかがわせるものである。

#### (iv) 擬石の表現

有栖川宮公園の擬石は、池泉の護岸に点々とみられた。その表現としては、甌穴のようなくぼみを施した点が特色となっている。聞き取り調査<sup>8,9)</sup>では、モルタルが半乾きのうちに軍手のような厚手の粗い布で掘り窪めたという方法が示唆された（写真-3：右）。擬石の内部は、数石の間知石を餡子とし、その周囲にモルタルを塗着していることが確認できた。

#### (4) 松村製作所（松村組）の職人たち

松村重は、ひとりで擬木擬石を製作していたわけではなく、組織で製作にあっていた。すでに父の代には創業していたことは前述したとおりであるが、昭和10年代の会社広告<sup>39)</sup>を確認すると、松村製作所という組織であったことが判明する（図-1）。なお、昭和24年には合資会社松村組に組織変更している<sup>2)</sup>。昭和10年代の松村製作所は、豊島区日出町（現在の東池袋周辺）に所在した。100坪の社屋におよそ100人の職人が働いていた<sup>7)</sup>。そのなかで、松村を支える三羽鳥と評された番頭がいた。

そのひとり、新潟出身の池田九二四四である。松村とは親戚関係にあった。上野動物園の猿山の建設でも述べたように、彼は盆景も得意としていた。もうひとり、佐野定吉という酒豪、そしてもうひとり、代田ヨシオ（漢字不詳）という長野出身の人物であった。番頭格の者には、蛇腹仕上げでは右に出るものはいない、と職人間で評された渡辺某（通称、蛇腹のゲンさん）とその息子、渡辺エイジロウ（漢字不詳）が松村を支えた。職人は、骨組みを担当する者、仕上げを担当する者などと役割が分かれており、ある程度分業体制だったようである。職人たちは、少ない道具でさ



図-1 松村製作所の会社広告  
(出典：『日本造園士』第2巻1号、昭和14年)



写真-3 有栖川宮公園に遺存する松村重の擬木擬石表現（左：擬木に施された枝の切口、中：橋桁に付された相決りによる継手、右：甌穴状に造作した擬石）

さまざまな表現をする擬木擬石をつくったようで、おのおののバケツには、鋺、釘、鋏、筆しか入っていなかったのである<sup>7)</sup>。

松村は、図面を描くようなことはなかったようであるが、自分の内にある擬木擬石のイメージをスケッチで示し、製作にあたったという<sup>7)</sup>。

#### 4. 「擬木」「擬石」という用語の使用

日本近代において擬木は、「人造自然木」「コンクリート模擬木材」「コンクリート模擬人造天然木」などと椎原兵市や橋本八重三が呼称しており<sup>36,37)</sup>、擬石も新田長次郎や服部長七が「人造石」と呼称していた<sup>38,39)</sup>ようであり、「擬木」「擬石」という言葉が誰によって使用され始めたかというのとは分かっていない。ここで先述の『公園の設計』(井下清著, 昭和3年)<sup>20)</sup>を確認すると滝の設計について言及した箇所があり、「瀑布は旧来の天然石を築立つる工法に依らず、鉄骨鉄筋混泥土造を以つて岩壁を模造し」(185頁)と擬石を示唆している記載がある。さらに「瀧は瀑布の如く直立する岩壁を必要とせぬために人為的に營造することは容易であり(中略)構造としては天然石を組み合わせて混泥土の裏詰と為し、全部擬石を以てすることも出来る」(185頁)と述べ、「擬石」という用語を使用している。ただし、これは「擬」ではなく「擬」である。

上記文献刊行の翌年にあたる昭和4年、日比谷公園では5月21日から6月3日にかけて、庭園協会主催で「造園裝飾物展覧会」が開催されている<sup>40)</sup>。この展覧会では、松村重が、コンクリート造モルタル仕上げの井筒、屋形、卓、腰掛、植木鉢、踏石等を出品した。松村の出品作品は「実用向の点で大いに注目」<sup>40)</sup>され、審査の結果、優秀賞を授与された。松村の作品は「擬木庭園家具」、出品者としては「擬木、擬石製作販売」と昭和4年発行の「庭園と風景」第11巻8・9号<sup>40)</sup>で掲載され、ここに初めて「擬木」「擬石」の語が文献上確認できた(図一2)。展覧会を実見した龍居松之助や西川浩も、その所見・評価を述べた文章の中で、ともに擬木擬石の語を同誌で用いた<sup>40)</sup>。

このことをふまえ、松村家に聞き取り調査<sup>7)</sup>をおこなった結果、「擬」という文字に木や石を組み合わせて、擬木擬石という言葉を使い始めたのは松村重であるということが判明した。「木や石に擬えたもの」ということで使い始めたのであろうか。

ただし造園界では、昭和6、7年の段階でも「モルタル自然木」とか「人造自然木」の使用が見られ<sup>41)</sup>、統一された用語ではなかったと思われる。擬木擬石の用語使用について若干追求してみると、昭和9年に完成する天王寺公園拡張計画では、公園の入口門、橋梁、藤棚、動物園の猿ヶ島などにコンクリートの擬木が導入された。そのことを特集で報じた昭和9年発行の「建築と社会」17輯4号<sup>42)</sup>では、天王寺公園の工事に関する記載はすべて「擬木」に統一されている。また、昭和11年に日本ポルトランドセメント同業界が発行したパンフレット第20号はその名称が『擬木・擬石』<sup>43)</sup>とあり、また、東京美術学校で教鞭をとっていた矢崎好幸が昭和14年に著した『実技詳解セメント工』<sup>44)</sup>でも記載は「擬木」(ただし板状のものは「擬板」と記載)、「擬石」とある。したがって、擬木擬石の用語の一般化は、上記の文献が刊行された昭和10年頃とみなすことができると、現段階では理解しておく。

なお、井下の「擬」という文字の使用であるが、図一1の松村製作所の会社広告にも「耐久耐火擬木擬石製作」という記載や、昭和13年発行の『全国著名園芸家総覧(第十三版)』<sup>44)</sup>における報春園工房、臨南園の会社広告に「擬木」「擬石」の記載が見える。これらもおそらく「ギボク」「ギセキ」と読んだのであろう。「混泥土(コンクリート)の木」「混泥土(コンクリート)の石」という言葉を縮めたのであろうか。

#### 5. 松村重の人柄

松村重とは、村松によれば、「地味で実直で世話好きで頼まれれば否の言えない実に気前の良い、言ってみれば絵に描いたような江戸っ子職人」<sup>16)</sup>であった。松村家への聞き取り<sup>7)</sup>では、松村は仕事には大変厳しい一面をもっており、自分の仕事時の様子は、他人に見せることをたいへん嫌ったという。職人には頗る厳しく<sup>45)</sup>、工期が迫っていても絶対に手を抜かない姿勢を貫いた<sup>46)</sup>。

また松村は、当時としては珍しく、左利きであった。細かな擬木擬石の造作も左でこなした<sup>7)</sup>。

松村は熱海での仕事に出かける日の朝、歯を磨いていたところ倒れ、急逝した。昭和37年3月7日であった<sup>7,16)</sup>。享年66歳。最期まで、仕事一筋の職人であった。

#### 6. おわりに

本稿では、近代東京を中心に、擬木擬石が導入された経緯を再検討し、擬木擬石の実際にあつた松村重の足跡を追いかけてきた。この作業の結果、知りえたことを以下にまとめるとともに、今後の課題を明記して、本論文の結言としておく。

イ：近代東京におけるモルタル塗の擬木擬石の導入を着想したのは、東京市2代目公園課長、井下清であった。大正14、15年頃にパリのビュットショーモン公園で多様な擬木擬石に出会った井下は、関東大震災後の東京に、公園の不燃化を意図してコンクリートやモルタルを施した擬木擬石による公園施設を導入しようとしたと考えられる。

ロ：井下清から擬木擬石の製作を勧められ、公園施設の実作にあつたのは左官師の松村重であった。松村の擬木施設の最初の作としては、大正15年に完成したと考えることが有力な、井の頭恩賜公園の池に架かる橋であった。

ハ：昭和初期に、松村重は大塚公園、安田庭園、清澄庭園、上野動物園、有栖川宮記念公園など、多数の東京の公園空間の擬木擬石による施設製作を手掛けた。とりわけ、上野動物園の猿山は、日本近代の動物園の猿山(猿島)の元祖と評価できるものである。

ニ：松村重は、慶応義塾の日吉台から発掘で見つかった弥生時代の堅穴住居址の保存整備を、昭和11年に擬木擬石の手法を応用して手掛けた。これは、発掘調査や地下遺構にもとづいた遺跡整備の事例として、現時点での最初期の事例である。造園関係者が



図一2 「造園裝飾物展覧会出品者一覽」にみる「擬木」「擬石」  
(出典：『庭園と風景』第11巻8・9号、昭和4年)

近代にすでに遺跡の保存整備に関与していたことが注目される。  
ホ：現在、通常使用される「擬木」「擬石」という用語は、松村重が使用し始めたらしい。文献における初出は昭和4年であった。この言葉は、昭和10年頃には造園界で一般化したとみられる。

今後の課題としては、松村重の擬木擬石の製作方法について本稿では概要を見たにすぎないため、その詳細を明らかにしていきたいと考える。その理由は、本論文の冒頭で述べた琴ノ浦温山荘庭園の保存整備や、古谿荘の建造物の保存活用における庭園の取り扱いにおいて、擬木擬石を如何にして補修、修復していくかの具体的な検討が進んでおり、それら近代庭園を保存していくための材量的な知見、技術的な知見を提供したいからである。また、近代に施工されたコンクリート造モルタル仕上げの斯様な施設が、造成後90年前後経過した現在、どれくらい劣化が進行しているのかを研究調査することも、近代の名勝地保護の観点からは急務の課題といえるであろう。

謝辞：本論文を執筆するにあたり、聞き取り調査、現地調査にご協力くださり、貴重な史料資料をご提供いただいた、松村賢氏、松村守氏、松村尚子氏（以上、有限会社松村擬木）、松村愛美さん、松村健太郎君（以上、東京農業大学造園科学科学生）に感謝申し上げます。

## 補注及び引用文献

- 1) 栗野隆 (2013) : 古谿荘庭園の特色を探る : 平成25年度日本庭園学会全国大会研究発表資料集, 54-57
- 2) 栗野隆 (2009) : 擬石・擬木の造園的利用の系譜からみた琴ノ浦温山荘庭園の造園史的 위치 について : ランドスケープ研究 72(5), 439-442
- 3) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課・京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター編 (2012) : 京都市未指定文化財庭園調査報告書第1冊 岡崎・南禅寺界隈の庭の調査 : 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課, 163-164
- 4) 矢崎好幸 (1939) : 実技詳解セメント工 : 学校美術協会出版部, 183-190
- 5) 栗野隆・丸山宏 : 日本近代の擬石・擬木製作法 : ランドスケープ研究 74 巻増刊号 造園技術報告集 (6) 2011, 140-143
- 6) 栗野隆 (2011) : 近代の大阪および阪神間を中心とした擬木・擬石・擬岩の導入と展開 : ランドスケープ研究 74 (5), 359-364
- 7) 松村賢・松村守 (2014.4.23) : 松村重についての聞き取り調査 (於 : 有限会社松村擬木) 本調査では、松村重の生没年、出身地、人柄、擬木擬石製作に関与した経緯や時期、主たる擬木擬石の製作事例、組織の体制、交友関係、井下清との関係等について聞き取りした。なお、松村重を紹介した前島康彦による『有栖川宮記念公園』(郷学舎、昭和56年)では、「重」を「じゅう」と読ませたが、松村家の聞き取りの結果、「しげる」が正確であることが判明した (調査は約3時間程度実施)。
- 8) 有限会社松村擬木 (2014.7.12) : 松村重についての聞き取り調査 (於 : 亀戸天神社) 本調査は、平成26年度日本造園学会関東支部見学会 (企画 : 施工技術部会) 「亀戸天神の擬木工事 擬木の老舗松村擬木が魅せる匠の技」という現場見学会の一環でおこなったものである。筆者は、本見学会において「日本近代の擬木・擬石の創始者・松村重と松村擬木」と題して、松村重の出自、松村の近代東京における擬木擬石の業績、松村による擬木擬石の用語使用等について報告した。ここでは、有限会社松村擬木の方々により、筆者の報告内容について事実関係等の確認をいただくとともに、松村重以来継承されてきた擬木製作の方法について聞き取りし、亀戸天神社の藤棚の改修工事にもない実施された擬木製作の実演状況を実見した (調査は2時間半程度実施)。
- 9) 松村守・松村賢 (2014.8.5) : 松村重についての聞き取り調査 (於 : 有栖川宮記念公園) 本調査では、松村守氏・松村賢氏立会いのもと、松村重が手掛けたことが確実な藤棚、腰掛、園路柵、橋、擬石護岸、階段段鼻について詳細な観察をおこなった。具体的には、自然木仕上げのものは樹皮、切口に特に着目するとともに、製材仕上げのものは板目や柃目の表現方法や彩色等について着目し、いかなる部分に松村重らしさが表出されているかを松村家の方々とともに確認した (調査は3時間程度実施)。
- 10) 松村重が手掛けた擬木擬石に関する現地調査は、2009年から2014年にかけて、大塚公園、上野動物園、清澄庭園、有栖川宮記念公園、目黒雅叙園、成田山新勝寺でおこなった。
- 11) 近藤三雄 (2009) : わが国における屋上庭園の起源と黎明期における展開について : ランドスケープ研究 72 巻増刊号 造園技術報告集 (5) 2009, 200-2003

- 12) 金井利彦 (1980) : 新宿御苑 : 郷学舎, 36-37
- 13) 椎原兵市 (1924) : 現代庭園図説 : 現代庭園図説刊行会, 258-259
- 14) 筆者の所蔵する東京大正博覧会の絵葉書に「鉦山大模型館」というキャプションの入った模範山岳の全景写真が用いられたものがある。本絵葉書には「東京大正博覧会記念」、「大正三年自三月至七月」という印が確認できる。
- 15) 上原敬二 (1976) : 岩石・庭石・石組方法 : 加島書店, 77-78
- 16) 村松善豊 (1979) : 擬木擬石松村重について : 『緑の東京史』所収 : 思考社, 118-119
- 17) 前島康彦編 (1974) : 井下清先生業績録 : 井下清先生記念事業委員会, 117-120, 383-384
- 18) 越沢明 (2005) : 復興計画 : 中央公論新社, 78-86
- 19) 井下清 (1944) : 決戦と造園 : 庭園 26 (1), 1-2
- 20) 井下清 (1941) : 庭の防空防火 : 庭園と風光 23 (5), 9-12
- 21) 有限会社松村擬木 (1996 頃) : 手創り擬木のご案内 (松村擬木の会社パンフレット) 本パンフレットにはノンブルが振られていないが、見返しの「会社概要」に特許取得の件が記載されている。
- 22) 前島康彦 (1981) : 有栖川宮記念公園 : 郷学舎, 37-52
- 23) 前島康彦 (1980) : 井の頭公園 : 郷学舎, 83
- 24) 三鷹市企画部広報課編 (1996) : グラフみたか (9) : 三鷹市, 5
- 25) 井下清 (1927) 大塚公園の設計施工—新しい都市公園— : 庭園 10 (4), 6-8
- 26) 井下清 (1928) : 公園の設計 : 雄山閣, 185, 195, 247
- 27) 東京都編 (1982) : 上野動物園百年史, 105-115
- 28) 大島増次 (1988) : 園長のサル山 : 『古賀忠道その人と文』所収 : 古賀忠道先生記念事業会, 191-195
- 29) 東京都編 (1982) : 上野動物園百年史 資料編, 204
- 30) 方米次郎 (1934) : 天王寺公園の改造工事 : 建築と社会 17 (4), 35-42
- 31) 名古屋市長山動物園編 (1942) 東山動物園写真帖 : 名古屋市, 本文にはノンブルが振られていないが、見返しに本動物園の開園年が記載されている。
- 32) 慶応義塾 (1964) : 慶応義塾百年史 中巻 (後), 307-313
- 33) 矢崎好幸 (1935) : セメント工芸 セメントの扱いに関する科学的芸術的基礎と其の応用 : 丸善, 217-222
- 34) 高瀬要一 (1995) 遺跡復原論 : 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢 II : 同朋舎出版, 911-927
- 35) 松村製作所の会社広告 (1939) : 日本造園士 2 (1) : 日本造園士会, 奥付 8
- 36) 椎原兵市 (1928) : 庭園の設計と其实例 : 雄山閣, 115, 141, 163, 184, 195, 205, 224
- 37) 橋本八重三 (1930) : 植木屋の裏おもて : 六合館, 175-182
- 38) 新田長次郎 (1935) : 回顧七十有七年 : 合資会社新田革帯製造所, 469-471
- 39) 中根仙吉 (1996) : 服部長七伝 [復刻] : 岩津天満宮, 12-14
- 40) 日本庭園協会主催、東京市後援で開催された展覧会。昭和4年9月発行の「庭園と風景」第11巻8・9号には、同展覧会開催記事 (165-176)、龍居松之助「造園装飾物展覧会を見て」(152-153)、西川浩「造園展見たまへ感じたまへ」(154-156)などの記事が掲載されている。
- 41) 昭和6年より御大礼記念事業により、大阪では桜宮公園の拡張工事がおこなわれ、その工事概要が、昭和7年発行の庭園協会機関誌「庭園と風景」第14巻3号に掲載されている。その記事 (90-93)には「擬木」の語が確認される一方で「高欄は鉄筋混泥土表面モルタル自然木仕上げ」とか「橋面はモルタル木皮仕上げ」とも記載され、必ずしも「擬木」という用語に統一されていない。また、橋本八重三が昭和7年頃に作成したと思われる橋本庭園工務所の会社パンフレットでもコンクリート造モルタル塗の擬木を「人造自然木」と記載 (16-17) しており、擬木とは呼称していない。
- 42) 昭和9年発行の「建築と社会」第17輯4号に所収された天王寺公園グラフ (執筆不詳, 1-16)、天王寺公園の沿革と全貌 (椎原兵市, 17-25)、天王寺公園の改造工事 (方米次郎, 35-42)では「擬木」に統一されている。
- 43) 日本ポルトランドセメント同業界が昭和11年に発行したコンクリートパンフレット第20号のタイトルが『擬木・擬石』である。本文中の記載も、擬木擬石に統一されている。
- 44) 渡部泰輔編 (1938) : 全国著名園芸家総覧 (第十三版) : 大阪興信社, 本文にはノンブルが振られていないが、「東京府」の部の報春園工房、「大阪府」の部の臨南園の広告欄に記載がみえる。
- 45) 松村家への聞き取り調査によれば、松村重は、私生活においても職人には厳しく、風呂に先に職人が入浴すると、激怒してお湯を全部抜いたこともある。他方、子どもにはめっぽう優しい一面もあったという。
- 46) 松村家への聞き取り調査によれば、東京市内の公園に、擬木擬石を導入するきっかけを作った井下清の前では、松村は直立不動で、「ハイ！」「ハイ！」と緊張して受け答えをしていたようである。井下は、そんな松村をたいへん信頼し、仕事を離れても近い人間関係が築かれていた。正月の逸話として、松村は井下家の餅つきを例年頼まれていたという。松村の孫たちは、自転車で白と杵を載せて、池袋の松村の自宅から、井下の中目黒の自宅まで急いで行ったという。普段は井下家の家事を手伝い、井下夫人の愚痴を聞くまでもなった。松村は趣味らしい趣味もなく、琵琶が奏でる曲を聴くことを好んだという。酒は飲めなかったが、よく食堂に入ってはコーヒーを飲んでたようである。